

梅花女子大学短期大学部研究紀要  
第63号（2015年3月20日刊）抜刷

短期大学における早期英語教育指導者養成と  
指導者を囲む現状と課題

尼崎 豊志夫

# 短期大学における早期英語教育指導者養成と 指導者を囲む現状と課題

尼崎 豊志夫

AMAGASAKI Toshio : Junior College Education in Kids' English Courses  
along with Environment and Problems Surrounding Educators

キーワード：早期英語教育、小学校英語、英語必修化、早期英語指導者養成

## 1. はじめに

本稿では、本学英語コミュニケーション学科における早期英語<sup>i</sup>教育分野を俯瞰し、10年間の歴史を踏まえ短大での修学だけで早期英語指導者となることの難しさ、早期もしくは小学校英語教育指導者としての資格のあいまいさとその問題点を論ずる。また、短期大学卒業後にキャリアとして早期英語教育分野への進路選択の問題も示唆する。

現在、全国にある短期大学で早期英語教育関連の科目を設置しているのは25校、全体の約2.6%である<sup>ii</sup>。筆者が所属している梅花女子大学短期大学部英語コミュニケーション学科においても、早期英語教育を学ぶ目的で入学してくる学生が毎年いる。また、姉妹校である梅花女子大学文化表現学部国際英語科においても、早期英語教育指導者になりたいとキッズイングリッシュコースを選択する学生も少なからず存在するのが実情である。

また、2011年度から小学5・6年生に対して、外国語活動が必修化され、わが国の社会的現状においても、英語教育の導入時期が早まってきており、今後この動きはさらに加速していくものと容易に予測できる。

現に、2020年度から、3・4年は週1～2回、5・6年は週3回実施を想定し、5年生からは教科に格上げし検定教科書の使用や成績評価も導入するとの新聞報道があった<sup>iii</sup>。当然これに伴い、幼稚園以上の子供たちに英語を教えることのできる人材は今以上に求められるのは、明白である。

しかしながら、短期大学卒業にキャリアとして指導者たらんと希望する人材がありながら、法整備・環境整備が追い付かず、現場での混乱を招いている。

以上のことから、本稿の主な狙いは、小学校における英語指導の現状と課題を示し、併せて早期英語教育分野での指導者養成の現状とその問題点を論じる。

## 2. 小学校における英語指導の現状と課題

文部科学省は、必修化の理由を大きく3つ挙げている。

- ①各校独自の取り組みが進み、拡大した内容や時間数のばらつきを是正して最低基準を示すこと。

②小学校高学年が英語の音声や表現に慣れ親しみ、意欲や積極性を養うのに、適した時期と考えられること。

③英語以上に、言語力、コミュニケーション力の向上のため。

現在、英語指導者は原則学級担任が教えるという基本姿勢になっているが、担任に向けての小学校英語教師養成という、何をおいてもまず最初に解決しなければならない課題が存在する。そもそも、大学で小学校英語教育指導法を学んでいない担任が、英語を教えるという現実、小学校における英語教育環境が整っていないことを棚上げにした暴挙である。

現時点では、小学校での英語指導には【英語ノート】が用いられ、それに基づいて小学校高学年児童に対して指導が行われている。しかし、一部の小学校教員を除いて、大学で英語指導法を学んだ者はおらず、また英語自体を得意科目としなかった教員も多い。また、文部科学省は担任による英語指導を基本とするよう通達を出しているが、現場ではどう教えればよいのか混乱をきたしているところもある。場合によっては、Assistant Language Teacher（以下ALT）に丸投げという学校さえ存在する。換言すれば、小学校では担任だけでは英語指導が実施できないため、ALTや日本人の外国語指導専門講師、中学英語教員の派遣といった、専門家の助けが必要となっている。

また、小学校高学年と言えればかなり知的成長がみられ、歌や簡単なゲームでは知的刺激を受けられず、外国語活動に興味を持てなくなる児童もいる。幼稚園児であれば嬉々として取り組むHead, Shoulders and Kneesなどといった体を動かしながらの歌などを高学年児にやらせようとしても単純すぎてやりたがらない。また変声期を迎えた男子もおり、その児童たちは歌うこと自体を嫌がる。しかし、教える側が何をどうしてよいものか見当がつかないため、そのような活動を導入したりする場合が散見される。

小学校への英語教育導入当初から、英語を教えるなら、音楽や体育のように専門の教員が担当すべきであるという声もあった。しかしながら、文部科学省は小学校における指導は担任主導であることから、担任による英語指導を基本とするよう指示しており、それに則って英語指導は行われている小学校が大半である。

さらにALTや英語指導の専門家に任せたいと考える小学校も多いが、適任者が見つからないとかその予算がないという問題を抱えている場合も少なからずある。

小学校で扱う英語は音声に限られているために生じている問題もある。小学校3年生でローマ字の学習をしているにもかかわらず、読み書きの指導は中学まで行わないため、音声だけの学習に限らざるを得ない。小学校高学年になれば、記憶のきっかけとして文字学習導入は十分に効果を上げる。また、音声だけのコミュニケーションに限ってしまうと、母語においても発話することに抵抗感を持つ児童も少なからずいるが、このような子供に「喋らないといけない」というプレッシャーを与えてしまう。このような状況が続けば、間違いなく英語嫌いの子供を作ってしまう。

また、「can」は中学1年の2学期に初出するが、実際にはすでに小学校で既習している。それを、中学で初めて見る単語のように指導するのは、何のために小学校で英語を学んだのか、その意図が全く無視されている。すでに小学校で習っている事項をなぜ中学校で再び習いなおすのか、理解の域を超えている。このような項目はcanだけにとどまらない。今以上に小中学校の連携を深め、このような無駄を省くべきである。既習項目を再度学習するのではなく、学ん

だということを前提にコミュニケーション能力向上を目指した言語活動に終始すべきであろう。

2012年度から実施されている中学の新学習指導要領では、授業時数の増加もふまえ、指導する語彙数が以前の900語から1,200語程度へと増えている。すでに小学校の外国語活動で多くの単語に耳でふれているからこそ、中学校で語彙数をふやせるという考えに基づいている。高校でもコミュニケーション重視の授業となり、現学習指導要領には「授業は英語で行うことを基本とする」ともり込まれている。これは小学校での外国語活動が移行期間に入った2009年度の小学校6年生が高校1年生になる2013年度から始まった。小・中学校で培ったコミュニケーション能力をベースにするからこそ、高校ではさらに高度な英語の授業が実施できるという発想である。

しかし、現役の英語教員で英語のみで授業を行える教員は一部にすぎない。たとえそれができる教員がいても、学習する側の高校生にそれ相当の英語力がなければ、授業として成立しない。文部科学省の通達は、単なる理想を述べているだけでしかない。

現状を顧みることなく、このような方針を打ち出すのは無謀で、このまま行けば、被害者は学習者たる児童生徒であることに気づいていない。

### 3. 児童英語講師養成講座の現状と課題

一般的には児童英語として小学校における英語教育を指すが、幼年期から小学校までの英語教育として期間を長くとらえているため、早期英語として児童英語とは分けて考えている。必然的に早期英語の中に児童英語を含めて論を進める。ここでは一般的に呼ばれている児童英語を指導する教員または講師養成講座について言及するので、早期英語とはちがったものとして扱う。

小学校における英語指導のスペシャリスト養成を目的とした小学校英語指導者（J-SHINE<sup>iv</sup>）資格習得プログラムや、アルク社<sup>v</sup>やベネッセの子供英語指導者養成講座といった早期英語教育人材育成のコース修了証は存在するが、あくまでも当該団体の認定であり、小中高における教員免許状や保育士・幼稚園教諭として認められるものではない。

そのため、履歴書に記入できる公的資格とは認められていない。前述した通り、幼稚園・小学校での英語教育に携わる人材の要求はさらに高まるのであるから、このグレイゾーンを早急に整備することは焦眉の急である。

民間の児童英語教師養成講座でカリキュラムが公表されているものとして、ここでハートステップカレッジのものを挙げておく。

ベーシックコース	インストラクター 資格取得コース	エキスパートインストラクター 資格取得コース
オリエンテーション	就職指導	小学校英語指導者登録について
英語文化の授業への取り入れ方	歌・チャンツによる教授法 (中・上級、実践) 就職カウンセリング	総合学習の意義
子ども英会話教師とは何か	絵カード・ゲームによる教授 法(中・上級、実践)	学級担任と外部指導者の役割
歌による教授法(初級)	英語検定試験対策・英文法力 アップ	国際理解教育・異文化理解教育 について

体験ミニレッスン	フォニックスと発音指導 (中・上級、実践)	英語活動におけるコミュニケーション方法と指導 (概論、実践)
子どもの心理	子どもに教える実習	ALT/JLT/CRT との連携
ゲームによる教授法 (初級)	クラスルームイングリッシュ (中・上級、実践)	小学校英語活動の実例
子どもとの関わり方	発達年齢と教材の選び方	小学校でのレッスンプランの立て方 (概論、実践)
フォニックスと発音指導 (初級)	TPR と非言語コミュニケーション (概論・実践)	EFL (外国語) としての英語
幼児に英語を教えるには	手作り教材	資格試験
クラスルームイングリッシュ (初級)	絵本を使った教え方 (概論・実践)	英語活動と英語科の違い
適性を活かした指導の仕方	様々な教授法	実習とスーパーバイズ制度について
レッスンプランの立て方 (1レッスン)	レッスンプランの立て方 (年間)	
外国人講師による英会話 (面接対策)	外国人講師による英会話 (スピーチ、ミニレッスン)	
ミニレッスン (実践)	ミニレッスン (実践)	

#### 4. 早期英語指導者としての英語力

一般的に小さな子供や小学生を教えるのだから、それほど高度な英語力は必要ないだろうという意見がある。たとえば、児童英語教師養成講座の入学資格としての英語力は英検2級合格、TOEIC 500点以上、TOEFL-ibt 35以上のいずれかを要求するところが多い。また、実際に指導経験のある人たちも「最低英検2級」という意見が大半である。

しかしながら、誤解しやすいのがこの英語力の具体的数字である。たとえば、「英検2級」という英語力は、それだけあれば児童英語教師が務まると思いやすい。実際経験すればわかるが、その程度の英語力では心もとない。キャリアのスタートとしてであれば、という条件を満たすだけで、5年も指導者として働いていて、その程度の英語力レベルでとどまるようなら不十分である。

#### 5. 本学におけるカリキュラム

本学における早期英語教育関連科目群は、いわゆる小学校における英語教育指導者育成を目指すものではない。

将来、学生たちは結婚し母親になっていくであろう。そしてその時に、自分の子供が英語嫌いでもいいと、誰が考えようか。英語嫌いを作らない、そのためのノウハウを本学で学んでほしいと考えている。たとえ、自分の英語力が十分でないとしても、そして自分の子供がbilingualでないとしてもbiculturalには育ててほしい、母親ならそう願うはずである。本学英語

短期大学における早期英語教育指導者養成と指導者を囲む現状と課題  
 コミュニケーション学科では、その環境を構築するノウハウの指導を目指しており、その延長  
 線上にキャリアとしての早期英語指導者があると考えている。卒業後のキャリアの一つとして  
 指導者になるための基礎作りだけを目指しているわけではない。しかしながら、キャリアとい  
 う視点から論ずることを求められるのも現実である。

ここで各早期英語関連科目の内容を示しておく。

#### 早期英語教育論

授業のテーマ	早期英語教育の意義を考察する。
授業の概要	国際化の進む現在、小学校にも英語教育が教科として正式に導入され ている。これにより以前にも増して幼児・児童に 対する英語の指導者 育成が求められている。これまで伝統的に守られてきた中学就学以前 に英語教育を行うことにどのような意義があるのか、またなにをどの ように指導するのかを考察する。
学習の到達目標	1) 家庭内での英語教育が幼稚園等でどのような違いがあるか理解する 2) 教育のための手段方法を学ぶ。

#### 児童心理学

授業のテーマ	児童期の発達的特徴、適応上の諸問題を理解する。
授業の概要	児童期における様々な発達的特徴や課題を明らかにし、発達上の問題 や適応上の問題も取り上げる。また、具体的な教育的支援、心理的支 援の方法についても触れる。児童期は、環境や時代の変化に影響を受 けやすい時期でもあるので、子供を取り巻く社会的問題に対しても理 解を深める。
学習の到達目標	1) 発達過程の中での児童期の位置と特徴を理解する。 2) 子供を取り巻く様々な課題に対する支援方法の理解も深める。

#### 早期英語の教材活用と指導

授業のテーマ	児童、幼児に英語を教えるために必要な教材研究と活用について
授業の概要	将来、児童、幼児英語指導者を目指す学生がどのような教材でいかに 教えるかを具体的に体得することを目標にする。
学習の到達目標	子どもに英語を教えるためには自分自身の英語力を高め、指導者とし での資質を養う。 その上で、子どもたちの知的、精神的発達段階を知り、一人ひとりの 全人格的教育を目指す。

GDM指導演習

授業のテーマ	小学校高学年児童に英語を教える方法を学ぶ。
授業の概要	小学校高学年児童に英語を教える教授法として、GDM（Graded Direct Method）母語を使わず、学ぼうとする言語のみで段階的に指導する教授法を学ぶ。授業では、先生や生徒の役をしながら、教える際の注意点を体験的に気付き、効果的な教え方を修得する。
学習の到達目標	小学校高学年児童に GDM で英語を教える方法を修得する。

発音クリニック

授業のテーマ	日本語と英語における音の違いを認知し、なおかつ発音できるように努める。
授業の概要	日本語と英語における音の違いを解説し、発音練習を通して英音の習得に努める。
学習の到達目標	1) 日本語と英語の音の違いを、まず日本語音声で捉え理解を深めた上で、英語の正しい発音を習得する。 2) 英語らしいスピーキングのために基本的なリズム・アクセントやイントネーションを習得する。

早期英語指導演習

授業のテーマ	早期英語教育の実践
授業の概要	1) 訪問前の予備知識として知っておくべきことについて事前講義を受ける。 2) 実習体験をおこなう
学習の到達目標	英語教育を行っている幼稚園を訪問し、その実際を参観をする。加えて事前および事後学習を通して、教室内で学んだことを実際の教育現場に生かせる実践力を培う。

早期英語教育コースの総仕上げとして、早期英語教育関連科目をすべて履修したのち、早期英語指導演習では近隣の清水学園安威幼稚園<sup>vi</sup>と梅花学園梅花幼稚園において保育の様子を見学しマイクロティーチング<sup>vii</sup>形式で指導を行っている。

本学における早期英語教育コース修了認定証は、以下の条件を満たした場合に申請を受け付け発行している。

早期英語教育コース修了証の発行には、同関連科目すべてを履修し、英語力を証明しなければならない。早期英語関連科目は、「早期英語教育論」、「児童心理学」、「早期英語の教材活用と指導」、「GDM指導演習」、「発音クリニック」および「早期英語指導演習」のことである。また、英語力の証明は、①実用英語技能検定（英検）2級合格、②TOEIC 550点以上取得、③TOEFL-iBT 35点以上取得、のいずれかを在学中、あるいは卒業後2年以内に証明することとしている。

## 6. 指導者というキャリアの現状と課題

短期大学卒業と四年制大学卒業では、その間における生活の中での成長に時間の経過とともに差があり、20歳前後の成長では、いかんせん22年の人生を生きてきた人物成長には太刀打ちできないという感想を持たざるを得ない。

また、早期英語指導者としての就職先の確保という問題が存在する。一般的な早期英語指導者に対する保護者の要求にしても、『ネイティブに教えてほしい』というもので、この要求に応えると、どうしても日本人指導者としての就職先絶対数が少なくなり、実際に職を得ることは奇跡に近い。この点で、短大卒の幼稚園教諭とは違った就職状況と言わざるを得ない。

## 7. 指導者というキャリアを目指すために

指導者を目指す以前に学生たちの英語力向上は、我々教員が日夜努めていることであるし、指導者になるためには絶対条件である。

最重要課題の一つとして、学生の学力向上が挙げられる。早期英語教育コース修了認定証発行に際しても、主だった英語力判定試験の合格もしくは一定の得点を挙げることを条件としている。しかしながら、実際に認定書発行に至ったケースは、わずかに18件である。

振り返って、本学のように早期英語教育に携わる人材育成のコース、またはプログラムを設置している短期大学で修学し卒業しても、短大2年間での学習だけでは、幼稚園であれ小学校であれ、早期英語指導者たるに十分な技量や知識を習得することは甚だ難しい。

大学生の基本的英語力の低下はますますひどくなってきているが、短期大学生のそれと比べれば、まだ状況は明るいといえる。このように低下してきている英語力を持って子供に英語を教えるキャリアを目指しても、目的達成できる学生は少ないと言わざるを得ない。

次に、英語音声の習得が重要な要素である。なぜなら、児童の英語発音能力を決める、いわば英語好きと英語嫌いの分岐点だからである。そのため、学生の発音矯正は必要不可欠で、英語らしい発音ができるようになった学生も自信につながる。

## 8. まとめ

本稿では、短期大学における早期英語教育指導者養成について俯瞰してきた。併せて、キャリアとして早期英語教育の分野に身を投じた場合、どのような現状が待ち受けているか、その課題は何であるかを論じた。

本学では、一般的な「コース制」と呼ばれるような早期英語教育指導者養成コースを設けていないため、英語力向上を第一の柱として学科のカリキュラムは構成されている。その結果、2年間という限られた時間内では、早期英語に特化したクラスを多く提供することができなかった。

早期英語教育という専門的な分野と、一般に通用する英語力を持つことができれば、この厳しい就職難の時代に、短期大学生にとって進路選択肢の一つとなりえるはずである。

今後、「コース制」を含め、カリキュラムの充実を図りより実践的なアプローチを模索していきたいと考えている。

尼崎 豊志夫

## 参考文献

- 江川美知子『大学における児童英語教師/小学校英語指導者養成プログラムの開発』日本児童英語教育学会研究紀要 (27), pp.53-65, 2008
- 加藤あや美『短期大学における児童英語教師養成について』桜花学園大学人文学部研究紀要 (13), pp.43-50, 2011
- 鈴木理枝『国際短期大学児童英語インストラクターコースにおける児童英語教育』国際短期大学紀要 (23), pp.107-120, 2008

## 脚 注

- <sup>i</sup> 一般的には児童英語として小学校における英語教育を指すが、幼年期から小学校までの英語教育として期間を長くとらえているため、早期英語として児童英語とは分けて考えている。必然的に早期英語の中に児童英語を含めて論を進める。
- <sup>ii</sup> JS日本の学校  
[http://school.js88.com/success/scsearch/jsc\\_result\\_job:scl\\_tp\\_cd:2:j:223:from:catalog.htm](http://school.js88.com/success/scsearch/jsc_result_job:scl_tp_cd:2:j:223:from:catalog.htm)  
(Accessed on September 27, 2014)
- <sup>iii</sup> 毎日新聞 (2014年9月26日)
- <sup>iv</sup> 小学校英語指導者認定協議会 (Japan-Shogakko Instructors of English) の略称で、日本における「小学校での英語教育の普及・発展を支援する」という趣旨のもと2003年2月に民間主導で設立された英語教育指導者の資格認定を行うNPOである。
- <sup>v</sup> <http://www.alc.co.jp/kid/kcschool/school/course/>
- <sup>vi</sup> 1949年設立の私立幼稚園。大阪府茨木市在。
- <sup>vii</sup> 指導法を学ぶ方法論で、基本的には少人数で授業時間を短縮した模擬授業を行うことにより、授業運営の基礎的能力を育成する方法である。場合によっては一場面だけといった5分程度のものから、1回の授業分に相当するものもある。